

# 本棚 ぶらり

## テーマ 人形

### 『たまさか人形堂物語』

つはらやすみ  
津原泰水／著

文藝春秋 2009年



会社を突然リストラされ、家に引きこもっていた主人公の濡。ある日、祖父の入院を機に、祖母の形見である人形店「玉阪人形堂」を引き継ぐことになる。

ちょっとした人形の小売りと人形の修復で店はそこそこ忙しい。傷ついた人形とともに、人形にまつわる謎が人形店のもとに運び込まれてくる。その謎を、従業員である人形マニアの富永くん、高い技量を持つが素性の知れない職人の師村さんとともに解き明かしていく、連作短編集となっている。3人の関係に心が温かくなり、ついでに人形にも少しだけ詳しくなれる、そんな1冊だ。

### 『人形の誘惑』

いのうえしょういち  
井上章一／著

三省堂 1998年



薬屋の店先にはカエルの人形が置いてあり、ウサギもいれば、ゾウもいる。まるで小さな動物園のようだ。日本は不思議な国だと、ある外国人が驚いたそうである。

また、戦前の日本ではマネキン人形が、まだ高価でめずらしく、各地へのセールスのときには、寝台車の寝台には人ではなくマネキンを寝かせ、配送の際には、人力車に乗せ、後押しをするのは販売員であったという。

そんな店頭の人形からはじまり、ビリケン人形、福助人形、二宮金次郎像に至るまで、幅広くその歴史と文化を解説する。人形がいかに関わっているかを知ることができる数々のエピソードは、興味深い。



### 『子供を祝う端午の節句と雑祭』

これさわひろあき  
是澤博昭／著  
淡交社 2015年



子供の健やかな成長を願う大人の想いは、いつの時代も変わることはありません。子供の幸せを祈り、病気や災いをさける心が、日本の貴重な伝統文化である節句行事をつくりあげてきました。

日本古来の年中行事というイメージがある端午の節句や上巳の節句ですが、人々の生活に定着するのは、300年から250年前の江戸時代のこと。節句行事を彩る人形をはじめとする鯉幟や羽子板、破魔矢などの節句飾りが、当時の人々の生活の中でどのような意味や目的を持ち、どのように広がり、どのように発展していったのでしょうか。

本書は、令和の現在でも行われている節句について、新たな一面を見つける一冊になることでしょう。

### 『りかさん』

なしきかほ  
梨木香歩／著  
新潮社 2003年



ひな祭りのお祝いに、リカちゃん人形が欲しいと、小学生のようこは祖母にお願いをする。しかし届いたのは「りか」という、名前だけは同じ、おかっぱ頭の市松人形。このりかさんは、自分を愛してくれる持ち主と心を通わせ、会話を交わすことができる不思議な人形だった。ようこはこれをきっかけに、たくさんの人形たちの、それぞれの持つ過去や思いに出会っていく。例えば、アメリカから送られた親善人形が、戦時中は敵国のスパイだとして、竹槍で突かれ火に焼かれてしまう。無残な姿のまま保存されていたその人形をりかさんとようこは、やさしく抱きかかえて癒していく。お互いを大切に思う気持ちを、人形と持ち主側の両方の立場から新鮮な視点で描く。